

# フレーベル教育学研究における 父性と母性の観点について

豊 泉 清 浩

群馬大学教育学部学校教育講座教育学教室  
(2012年9月26日受理)

## Über den Gesichtspunkt von der Väterlichkeit und der Mütterlichkeit in der Forschung der Pädagogik Fröbels

Seiko TOYOIZUMI

Department of Education, Faculty of Education, Gunma University  
(Accepted on September 26th, 2012)

### はじめに

フレーベル (F.W.A. Fröbel, 1782-1852) の教育学は、父性が強い宗教であるキリスト教を根源としている。そのため、彼の著作には、神の父性や父親の役割が強調されている時期がある。しかしその後、父性についての論述が目立たなくなり、母親の役割や母性が強調されてくる。しかもフレーベルは、幼稚園の創始者であるため、彼の教育学は母性の方が目立ちやすい。そこで本稿において、父性と母性の観点とは、ユング (C.G. Jung, 1875-1961) の分析心理学を方法として、フレーベル教育学における父性と母性の特徴を探るとともに、父性と母性の関係を明らかにし、そのことが彼のキリスト教的世界観である「球体法則 (das sphärische Gesetz)」といかに関連するかについて考察することを意味する。

本稿では、まず父性原理と母性原理の機能について考察し、次にフレーベル教育学における父性と母性について、彼の著作における父親と母親の役割の論述から探る。そしてフレーベル教育学における父性から母性への展開は、学校教育学から幼稚園教育学への展開に関係していることを指摘する。それから、球体法則の特徴を、父性と母性の対立と結合に

捉え、キリスト教の神の父性と母性を探る。

それゆえ本稿の目的は、球体法則は、父性と母性の対立を結合している点から見ると、グノーシス主義及び錬金術の発想に親近性を持ちながら、父性と母性を包含している聖書の神を示唆する思想であったということを明らかにすることにある。

### 1. 父性原理と母性原理

松本滋は、『父性的宗教 母性的宗教』において、世界の宗教に主に父性に基づく宗教と、主に母性に基づく宗教があることを指摘している。松本は、「父性的宗教」と「母性的宗教」という語を用いることによって、二つの基本的文化類型の根底にある人間の発達心理あるいは人間関係の心理にまで、分析を深めてみたいと考えている。松本によれば、「父性的宗教」と「母性的宗教」というのは、フロイトの精神分析をはじめ、これらさまざまな社会学者や思想家たちのもたらした理論的貢献を土台にしながら、自分なりに構成した一つの理論的枠組、概念図式である<sup>(1)</sup>。

松本は、母性と父性の特徴について次のように述べている。「母親が自然的な世界を表わすならば、父

親は規範的な世界を表象しております。母親があるがままの世界に結びついているならば、父親はあるべき世界に関わっていると言うことができます。様々な宗教の中で、従順ということが主な徳で、不従順が罪となるような場合、これは父親的な原理が働いていることを示しております。法律とか秩序とか、あるいは訓練というものは、本来父親的世界の特色と言えます<sup>(2)</sup>と。したがって、「以上を要するに、母親というものは、子があるものとして愛し包む、父親は子があるべきものとして愛し導く、と言ったよいかと思います<sup>(3)</sup>」。

母性的宗教とは、母性原理に基づいた宗教である。つまり、人間心理の発達最初の段階、自他がまだ分化していないような、母親との一体性、あるいは母親によって代表される世界との一体性の状態に結びついているものである<sup>(4)</sup>。これに対して、父性的宗教とは、父性原理に基づいた宗教である。母性的宗教が人間心理の最初の発達段階に対応するならば、父性的宗教はエディプス期に特に関係している。つまり原初的自然的な母親的世界との分離が、父親の登場によって決定的となる時期である<sup>(5)</sup>。

松本によれば、「父性的宗教」と「母性的宗教」というタイプは、一種の理念型であり、世界にある現実の宗教は、いずれも純粋な形で父性的宗教あるいは母性的宗教であるわけではない。どのような宗教でも、両要素のさまざまなまざり合い、あるいは融合を示している。ただ、いずれか一方の要素が支配的な特徴をなすとき、他の反対の要素は相対的に「抑圧」され、表面に出ない傾向がある。人間の宗教においても、母性的なものや父性的なものが異質的な原理の上に立って、相葛藤し、また相補い合っていると理解すべきである。松本は次のようにいう。「人間個人が十全なものとして発展するためには、この両方が共に必要であるように、人間の文化、宗教が十全なものとして人間生活を豊かにしてゆくためにも、この父性的宗教と、母性的宗教との両方の原理が、バランスをとることが必要だと考えられるのです。すなわち、人間の成長の過程において、原初的母子一体感の安らぎが大切であると同時に、ともすれば停滞的束縛となる原初世界からの離脱、父性的

な声に導かれて一人立つ自律への歩みもまた重要なのです<sup>(6)</sup>」。

松本は、広く世界の諸宗教を見渡してみると、神あるいは神的・究極的存在を、父親的ないし父性的なもの（父なる神）として把握・表出している宗教と、母性的・母性的なもの（母なる神）としている宗教とに大別することができる<sup>(7)</sup>と指摘している。すなわち、「『母なる神』とは、原初的母子一体性の段階にその心理的根源をもち、無条件的包容性（母性原理）を主要原理とする神」である。これに対して、「『父なる神』は、意志の発達に伴う、より分化した父子関係の現われる段階に心理的根源を有し、条件的規範性（父性原理）を主要な原理としている神である<sup>(7)</sup>」といえる。

さて、河合隼雄は、松本滋の「父性的宗教と母性的宗教」についての論に興味深く関心を示しているが、独自の観点から、母性原理と父性原理について論じている。河合によれば、「母性の原理は『包含する』機能によって示される。それはすべてのものを良きにつけ悪きにつけ包みこんでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ<sup>(8)</sup>」。「かくて、母性原理はその肯定的な面においては、生み育てるものであり、否定的には、呑みこみ、しがみつきて、死に到らしめる面をもっている<sup>(9)</sup>」。「これに対して、父性原理は『切断する』機能にその特性を示す。それはすべてのものを切断し分割する。主体と客体、善と悪、上と下などに分類し、母性がすべての子供を平等に扱うのに対して、子供をその能力や個性に応じて類別する<sup>(10)</sup>」。「父性原理は、このようにして強いものをつくりあげてゆく建設的な面と、また逆に切断の力が強すぎて破壊に到る面と、両面をそなえている<sup>(11)</sup>」。河合は、このような相対立する二つの原理は、世界における現実の宗教、道徳、法律などの根本において、ある程度の融合を示しながらも、どちらか一方が優勢であり片方が抑圧される状態で存在していると考えている。また河合は、倫理観の観点から、母性原理と父性原理について次のように述べている。「母性原理に基づく倫理観は、母の膝という場の中に存在する子供たちの絶対的平等に価値をおくものである。それは換言すれば、与

えられた『場』の平衡状態の維持に最も高い倫理性を与えるものである。これを『場の倫理』とでも名づけるならば、父性原理に基づくものは『個の倫理』と呼ぶべきであろう。それは、個人の欲求の充足、個人の成長に高い価値を与えるものである<sup>(12)</sup>と。

ところで、ユングは、個人的無意識とは区別される、集合的無意識があることを発見した。集合的無意識は、個々人において発達するのではなく、遺伝していくのである。ユングは、人間の心の働きには人類共通のパターンがあり、人間はそのパターンに無意識に従っていると考える。彼は、この集合的無意識のパターンを「元型 (Archetypus)」と名づけた<sup>(13)</sup>。ユングは、「元型とは、それ自体は内容のない形式的な要素であり、《前もって形式を与える可能性》、ア・プリオリに与えられている、イメージ形式の可能性である<sup>(14)</sup>」という。ユングによれば、「母元型の特性は『母性』である<sup>(15)</sup>」。ユングは、母元型には両面的な特性があるとして、それを「優しく恐ろしい母」として定式化し、母の三つの本質的な面について、「守り育む慈愛」、「狂騒的情動」、「冥府的暗黒」を挙げている<sup>(16)</sup>。

ユング派のノイマン (E. Neumann, 1905-1960) は、『意識の起源史』において、意識の発達の諸段階が、神話の中に見出せるように、「元型」によって決定されていることを明らかにした<sup>(17)</sup>。始源には、蛇が自らの尾を飲み込んでいる円環として表わされるウロボロスが置かれる<sup>(18)</sup>。またウロボロスは、人生後半に心の諸対立を統合する自己形成の働きである「個性化 (Individuation)」の到達点である「自己 (Selbst)」をも表わす<sup>(19)</sup>。ウロボロスの次に、その支配下にある自我、すなわち太母の段階が現われる。この太母は、母親の特性、母性原理を体現しているものである。ウロボロスの始源状態から、「原両親」の分離によって意識が誕生する。つまりここで切断する機能を持つ父性原理が働き、父と母、天と地、光と闇、昼と夜、男と女などの区別を体験する。英雄神話における英雄の「竜との戦い」は、「原両親」との戦いであり、英雄の誕生は、無意識から分離された意識が、その自立性を獲得し、自我を解放することを意味する。

こうして、母性原理は、包含する機能であり、肯定的なやさしい面と、否定的な恐ろしい面を持ちながらも、すべてのものが絶対的な平等性を持つ。これに対して、父性原理は、切断する機能であり、統合一体となっているものを分割、区別し、個々の特性を際立たせる。

## 2. フレーベル教育学における父性と母性

フレーベルによれば、人間のすべての力や素質を覚醒し、発達させ、刺激して、人間の諸々の素質や諸々の力の要求を充たすことができるような能力を、人間の四肢や器官のすべてに付与することが、家庭の範囲内で行なわれる母親及び父親による児童保育の対象であり、目的である<sup>(20)</sup>。とりわけ幼児期の教育は、母親の役割が重要である。

フレーベルによれば、母親は、子どもに言葉で語りかけながら、子どもにさまざまな行為をさせるよう働きかける。母親は、子どもに、自分の身体が多様なこと、自分の身体にはいろいろな部分があることを示し、それを予感させようとする。母親は、子どもに、自分とは別のものであるが、しかも自分と一体になっている対象を直観させ、認識させようとする。母親が、子どもの鼻や耳を、軽く引っ張る行為は、将来子どもに、すべてのことを、したがって、自分では外から見るとも直観することもできないものをも、自分自身で認識させるために、子どもを導いたり刺戟したりする最初の行為である。「これらすべてのことは、子どもが将来少年になったとき、かれに、自分自身を意識させるようにしたり、また思索させるようにしたり、さらに自分自身について思索させるようにしたりするという目的を持っている<sup>(21)</sup>」。

母親は、子どもに、まず自分自身の行為を、自分自身で感じさせるようにするが、のちには、行為そのものを、子どもに直観させるようにする。フレーベルは、「きわめてすばらしいものがそこから発達してくるころの卵である共同感情そのもののほかに、母の愛は、すべてを包みこむ母の心は、子どものなかに潜む生命をも、運動を通して、子ども自身

に感じとらせようとする」<sup>(22)</sup> という。しかも、母親は、リズムのある拍子のとれた音声に合わせたリズムミカルな拍子のとれた運動によって、内なる生命を子どもに意識させようとする。

フレーベルによれば、子どもが生まれることは、眼に見えない精神的な本質、永遠に存在する本質が現われることであり、子どもにおける高い精神的な本質は、特に母がこれを予感する。「だからみよ、母の愛の愛撫が、子どもの心の奥底にむかって語りかけようとするほど、子どもの心はそれによってますます刺激されるように思われる」<sup>(23)</sup>。

フレーベルは、第一恩物が、ボールを媒介として母親が自分の愛する子どもと一緒にする最初の遊びであると指摘している。彼は、母親や保育者が第一恩物を用いて、幼児期の子どもに純粋な母性感情によって接することが重要であるが、その純粋な母性感情を容易に捨ててしまう場合があることを嘆いている。フレーベルは、「だがわれわれは、自然的な母性感情で正しくなされたものを明瞭に認識し、不断に連続的に保育し、そしてこのようにして両親や子どもにとっての生活、ならびに生活一般が、それ自身不断に相互に陶冶しあっている一つの全体、もしくは意識的に陶冶された一つの全体になるよう努力することを欲し、またそうなるようにつとめたいものである」<sup>(24)</sup> と述べている。

フレーベルは、身体的、精神的生命における母と子との関係の観察から、必然的に人間的なより高い生命にとって、非常に重要ないろいろな事実への注目が明瞭に現われてくると指摘している<sup>(25)</sup>。つまり知識や認識も母の愛と結びついて形成されるということである。フレーベルは、母親の高められた精神的状態や眼差し、そして母と子との間の身体的触れ合いや精神的触れ合いの重要性を強調している。

ところで、フレーベルは、論文「わがドイツ民族に寄せる」において、神を父と表現している。彼は、「神はわれらが父であり、われわれの全生命をとおして成熟した壮年に至るまでわれわれを保証してこられたという、このまったく単純な経験の上に、われわれの行動われわれの活動のすべてが基礎づけられている」<sup>(26)</sup> という。この神を根拠とする生きた宗

教に基礎を置く教育に、ドイツ民族のすべての成員に対する欲求と要求が認められる。フレーベルによれば、「宗教の要請にしたがってわれわれが自己と他人とを教育し、その要請に長くかつ多く忠実に生きれば生きるほど、神がわれらの父であることをわれわれは認めるのである」<sup>(27)</sup>。すなわち、宗教に基づく教育を通して、われわれは神が万物を創造し、人間に神的なものが宿っていることを自覚するのである。フレーベルは、明らかにキリスト教の神を父と捉えている。彼によれば、「イエスの宗教であるキリスト教は、次のようにわれわれに教えてくれるのである。万物は神から生じたものであり、万物は神が創り、神は万物の創造主、神は産みの親、人間の父であり、人間は神の子である、と」<sup>(28)</sup>。フレーベルは、父と子の関係を重視し、この関係を神と人間と同様の関係と見ているようである。彼は、「子どもは両親の、とくに父の本性と精神と諸性質とをみずからのうちに担っている。そうであるから、神の子である人間もまた、かれらの創造主でありかれらの父である神の本質をみずからのうちに担っているのである」<sup>(29)</sup> と述べている。

フレーベルは、少年期以降の教育における父親の役割を極めて重視して、次のように述べている。「われわれ両親たちよ、特にわれわれ父親たちよ——というのは、この年代においては、子どもの、すでに少年に成長しつつある子どもの特別な保育と指導は、われわれ父親に委ねられているのであるから——、われわれは、父親としてのわれわれの義務を、すなわちわれわれが子どもを指導するということ、遂行することによって、われわれに与えられるものを、静かにじっとみつめてみようではないか。そこからわれわれにもたらされる喜びを、かみしめてみようではないか」<sup>(30)</sup> と。そしてフレーベルは、父親から息子へ受け継がれることを強調し、次のようにいう。「息子ないし息子たちそれぞれは、きわめて微細な点や、最も特徴のある点にいたるまで、そのまま父である。ただ新しい独自性をまた持つだけである」<sup>(31)</sup> と。彼は、父親の担っているものが息子に継承され、息子が父親に似ていることから、神とイエスの関係を推論している。すなわち彼によれば、

「イエスと神との親密な統一的な関係を人間的に表示するには、父親と息子との関係によるのが、最も包括的で、かつすべてを尽くしているし、また最も真実でかつ適切である」<sup>(32)</sup>。彼は、神とイエスの関係は、人間の父親と息子の関係から理解できると考えている。またフレーベルは、「人間は、神に対して、地上の息子が地上の父親に対するのと同様に、純粋にかつ完璧に行動すべきものではなかろうか」<sup>(33)</sup>と述べている。つまり人間の息子が父親を敬愛し、父親に振る舞うように、人間も神に対して行動すべきであると主張している。それゆえフレーベルは、神とイエス、神と人間の間を、父親と息子の関係と同一のものと見なしている。

このように、子どもが少年期に近づく頃から、父親の役割が大きくなる。特に、父親の役割は、子どもに対する職業と宗教にかかわる教育において重要である。母子一体性が強い幼児期までに対して、少年期以降、父性原理の切断する機能が必要となる。つまり、ウロボロスの始源状態から「原両親」が分離し、父と母、男と女などの区分を体験する。少年期の人間は、人間の行為が分割されてそれぞれの職業としてあることを認識し、父親に職業に関する指導を受けながら、自己の存在を確立する。また創造的な父親の姿を通して、神との関係を自覚するのである。フレーベルが、父親から息子へ職業的な知識や技能が継承されることを強調する点は、家長制との関連を想起させられる。

### 3. フレーベル教育学における父性から母性への展開

キリスト教は、父性の宗教であるといわれる。フレーベルも、キリスト教を信仰し、その信仰を拠所として生きた。また、ドイツ民族がキリスト教と密接な関係にあることを自覚していた。そのため、初期の著作、すなわち論文「わがドイツ民族に寄せる」をはじめとするカイルハウ小論文集や『人間の教育』では、神は「父なる神」であり、人間はその父の子である。神の子である人間は、神に忠実に生きなければならない。とりわけドイツ民族は、神との関係

を自覚している人間の共同体であり、したがって民族教育、人類教育は、神と人間との相互作用を前提としなければならない。

カイルハウ小論文集では、カイルハウ学園の目的、内容、方法を、ドイツ国民の教育という観点から論じ、神と人間の父親における父性がかなり強調されている。『人間の教育』においても、神は教育の根源であり、少年期以降の教育において父親の役割が重視されている。一方、乳児期や幼児期の教育においては、母親の役割も十分考慮して論述している。

神の父性を強調することは、フレーベルのスイス時代の論文にも変わらず見られる<sup>(34)</sup>。しかし、スイス時代の最後に著わした論文「新しい年 1836 年は生命の革新を要求する」においては、父と母と子という三位一体を神的なものを実現する宗教的関係と捉えている<sup>(35)</sup>。愛情は神的なものの現われであり、子どもは、父親と母親の愛情によって、神的なものを表現するようになる。フレーベルは、この三者の相互信頼によって純粋な家庭生活を実現しなければならないと力説している。

フレーベルが、幼稚園の創設、恩物の普及に全力を傾ける時期になると、著作の中に父性は影を潜め、女性性・母性が強調されてくる。確かに彼は、幼稚園では、保育者の養成を目指し、その保育者は女性の仕事であると考えていた。また幼稚園は、真の母性を育成する場でもあると理解していた、したがって、女性性や母性の強調は必然の帰結である。

フレーベルの前期の著作において、男性性・父性が強調され、スイス時代が終わったあとの後期の著作において、女性性・母性が強調されているのを見ると、フレーベル教育学は、父性から母性へという方向に展開し、変化していったように見える。父性から母性への展開は間違いはないが、それを変化と見ると誤った解釈につながると思われる。なぜなら、前期の著作において父性が強調されているのは、学校構想と関係があるからであり、後期において母性が強調されているのは、幼稚園と関係があるからである。端的に言えば、フレーベルは、学校では主に父性による教育が行なわれ、幼稚園では主に母性による保育や教育が行なわれると考えていた。これは、

乳児期、幼児期の教育は母性が主導的で、少年期以降の教育は父性が主導的であると考えていたことによると思われる。少年期以降の学校において父性が強調されているのは、その時期が、キリスト教の権威を前提とした厳格な家父長制が支配していた当時の父性原理社会の準備段階と位置づけられていたからであると考えられる。いずれにせよ、フレーベルは、子どもの発達段階を通して、母性と父性の調和を志向していたと見ることができる。

#### 4. 球体法則の特徴

母性と父性の調和は、両者の対立と葛藤をも含みながら、フレーベルの球体法則にも見られる。球体法則は、フレーベルが、1811年ゲッチンゲンで、彗星が出現した期間に、直観的に構想したものといわれる<sup>(36)</sup>。ボーデ (M. Bode) による研究では、大きな球体の中心部に神が存在し、その球体には、「部分的全体 (Gliedganzen)」としての小さな球体がたくさんできる。球体法則は、対立の法則であり、男性と女性の法則であり、結婚の理論であり、媒介の法則であり、さらに人間形成の原則でもある。

『人間の教育』の冒頭の部分に表明されている世界観が球体法則である。それは端的に、「すべてのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している」<sup>(37)</sup> という思想である。つまり、「すべてのものは、神的なものが、そのなかに働いていることによってのみ、はじめて存在する」<sup>(38)</sup>。この世界観から、教育の使命が見出される。「意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが、人間の教育である」<sup>(39)</sup>。つまり、教育とは、人間に宿っている神的なものを、自己活動を通して表現させることへの助成である。

球体法則は、対立の法則であるとともに、対立物の結合の思想である。つまり、ノイマンの学説によれば、球体は、ウロボロスを表現する。ウロボロスは、無意識の状態、両性具有のシンボルであり、完

全性と全体性を示し、始源であり終末である<sup>(40)</sup>。したがってウロボロスは、「個性化」の到達点である「自己」をも表わす。球体法則は、キリスト教を根底に置くが、キリスト教の正統な教義である神、イエス、聖霊という男性性・父性に偏った三位一体ではなく、父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉え、そこに女性性・母性をも包含している。この場合、母は明らかにマリアを暗示している。

ユングが、論文「修道士クラウス」<sup>(41)</sup> において示唆するように、クラウスによる天における「母なる神」の幻視は、マリアの幻視を意味し、元型によるものであるとともに、キリスト教における父性の強さを補うものとして、正統な教義が成立する以前のキリスト教である原始キリスト教の成立以来、民衆の間でマリア崇拝が脈々と存在し続けたことに関係すると思われる。つまり、キリスト教におけるマリアの存在は、集合的無意識のパターンである元型として現われるだけではなく、集合的意識として、崇拝の対象でもあったということである。

フレーベルに大変強い影響を与えた詩人のノヴァーリス (F.v.H. Novalis, 1772-1801) は、マリア崇拝を持っていた。すなわちノヴァーリスは、カトリックを信仰していたが、カトリックの本質、キリスト教の本質を聖母崇拝に見ていた<sup>(42)</sup>。フレーベルは、ノヴァーリスからの影響もあり、かつ集合的無意識による「元型」に基づき、マリア崇拝を持っていたのではないと思われる。

ところで、キリスト教が、父性原理が強い宗教であるという見方に対して、神学者の吉山登は、聖書の神は、父性も母性も持ち合わせている神であることを強調する。吉山は次のように述べている。「よく聞かれる俗説に、聖書の神はあまりにも父性的なもので母性的な神に対するひそかな人間の欲求が、マリア崇敬によってカトリック教会の中に保たれているという解釈がある。このような解釈は文化人類学的に見えるが、聖書の解釈からは支持されえない。というのは、聖書の神は性別を創造した神(創世記1の27)であるから、父性的のみならず母性的にも、人類に対する愛を示すことはできる。例えば、旧約の預言者ホセアは、神の愛をきわめて母性的な配慮を

抱くものと述べているからである(ホセア 11)。マリア崇敬をもとに神の愛の母性的深みを黙想することは誤りではないとしても、その際、マリアは人間的にそれを表徴しているにすぎず、神の真に母性的愛は、人間の性別から想像される以上の、限りないものであることは忘れてはならないであろう<sup>(43)</sup>と。つまり、神は父性的であるから、それを補うためにマリアは母性的であると理解することは、聖書の解釈からは正しくないということである。スキレベークス(E. Schillebeeckx, 1914-2009)は、「神の贖罪的愛の善は、父性的であり、母性的である<sup>(44)</sup>」と述べている。

このような観点から見ると、球体法則は、男性性と女性性、父性と母性を結合している点において、キリスト教の神の持つ母性の側面を包含し、神の性格を捉え直し、聖書の神の正統な解釈に戻ろうとした立場と見ることもできるのではないかと思われる。ノイマンの意識の発達に関する学説から見ると、ウロボロスの次に大母の段階が現われるが、ここでウロボロスの始源状態から「原両親」が分離して、意識が誕生する。キリスト教では神を父と捉え、マリアを母と捉えることができるが、父なる神と母なる神マリアという捉え方は、この「原両親」に対応するのではないかと思われる。この世俗的な男女の性別役割に分離して捉える神の表現は、あくまでも地上の生活に対応させた捉え方であって、神は本来父性的にも母性的にも愛を示し、父性と母性が一体となっているのである。

ユングの思想によれば、男性性・父性の強いキリスト教に対して、女性性・母性をも包含し、対立物の結合を目指したのは、錬金術であった。さらにユングは、錬金術の源流を、1世紀から3世紀にかけて興隆したグノーシス主義に見ている<sup>(45)</sup>。グノーシス主義は、かつてはキリスト教の内部における最大の異端の立場と見られたが、その後の研究により、原始キリスト教と相互に影響し合った別の宗教であることがわかってきている。ユングは、西洋精神史において、表面流にあったキリスト教に対して、グノーシス主義は底層流に潜み、やがて錬金術に流れ込んだと指摘している<sup>(46)</sup>。しかも彼は、グノーシス主義

から錬金術への流れは、キリスト教の教義を補完する要素を持ち合わせていると考えている。それは、グノーシス主義が善と対立する悪も認める点に見られる<sup>(47)</sup>。球体法則における対立物の結合の思想は、キリスト教の正統な教義とは明らかに異なるものであり、それはむしろグノーシス主義及び錬金術の発想に近いものと考えられる。

フレーベルが生きた時代には、キリスト教の正統な教義においてマリアの存在は認められていなかった。1950年、カトリック教会において「マリア被昇天」の教義が正式に認められ、マリアは、天の花嫁として迎えられ、神性が与えられた。この教義は、ユングも指摘するように、時代の趨勢である、男女同権と合致するものであった<sup>(48)</sup>。またフレーベルは、保育の仕事は、まず女性の仕事であるとして、女性や母親に自覚を促すことを目指していた。したがって、幼稚園には、女性の保育者、女性の幼児教育の指導者を職業的に確立し、女性の地位を向上させるねらいがあったと考えられる。

こうして、球体法則は、神の母性をも包含し、「マリア被昇天」の教義の内実を先取りするものであったのではないかと思われる。なぜなら、球体法則が、父性と母性を結合していることは、神が愛を父性的にも母性的にも示すことに通じるからである。しかもこのように父性と母性を統合している神の愛は、マリアに神性が与えられることを前提にしなければ考えにくい。つまり、マリアに神性が与えられることによって、マリアの母性も神の愛の現われであることが明瞭になるのである。

## むすび

母性原理は、包含する機能であり、すべてのものが絶対的な平等性を持つ。これに対して、父性原理は、切断する機能であり、統合一体となっているものを分割、区別し、個々の特性を際立たせる。

フレーベル教育学における発達段階から見ると、母子一体性が強い幼児期までは母性原理が強く見られるが、これに対して少年期が近づくと、父性原理の切断する機能が必要となる。人間の行為が分割さ

れてそれぞれの職業として認識され、自己の存在が確立され、神との関係を自覚する。父親は、子どもに対する職業と宗教にかかわる教育において主導的な役割を果たす。また、フレーベル教育学における父性が強調されている時期から、母性が強調されている時期への展開は、その背景として学校教育から幼稚園教育学への展開に対応している。そのため、発達段階と、前期と後期の著作を合わせて全体を見渡すと、父性と母性の調和を志向していたことが見られる。

ユング心理学の観点から見ると、球体はウロボロスであるとともに「自己」のシンボルである。つまり始源であり、対立物を結合した状態である。球体の中心に存在する神は、父性と母性を統合している神である。それゆえ、ウロボロスが両性具有のシンボルであることから、球体法則は、教会の教義による神の父性と民衆の崇拝の対象であるマリアの母性とに分離している神の愛を、統合し、聖書の神を示唆する思想であったと考えることができるのではないと思われる。

#### 注

- (1) 松本滋『父性的宗教 母性的宗教』東京大学出版会、1987年、4頁。
- (2) 同上書、14-15頁。
- (3) 同上書、15頁。
- (4) 同上書、19-20頁。
- (5) 同上書、20-21頁、参照。
- (6) 同上書、25頁。
- (7) 同上書、89-90頁。
- (8) 河合隼雄『母性社会日本の病理』中央公論新社、1976年、9頁。
- (9) 同上書、9頁。
- (10) 同上書、10頁。
- (11) 同上書、10頁。
- (12) 同上書、13頁。
- (13) Vgl. C.G. Jung, *Gesammelte Werke*, 9. Bd.1, *Die Archetypen und das kollektive Unbewußte*, Hrsg.v.L. J.-Merker, E. Rūf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S. 11-51. S.53-61. C.G. ユング、林道義訳『元型論〈増補改訂版〉』紀伊國屋書店、1999年、11-19頁、27-76頁、参照。  
豊泉清浩「フレーベルの球体法則における対立と結合——ユング心理学の観点から」、『人間教育の探究』第20号、日本ベスタロッター・フレーベル学会、2008年、5頁、参照。  
豊泉清浩「フレーベル教育学の研究方法としてのユング心理学について」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第58巻、2009年、115頁、参照。
- (14) *ibid.*, S.95. 同上訳書、105頁。
- (15) *ibid.*, S.97. 同上訳書、106-108頁。
- (16) Vgl. *ibid.*, S.97. 同上訳書、108頁、参照。
- (17) 前掲、豊泉清浩「フレーベルの球体法則における対立と結合——ユング心理学の観点から」、9-12頁、参照。
- (18) Vgl. E. Neumann, *Ursprungsgeschichte des Bewusstseins. Mit einem Vorwort von C.G. Jung*, Walter Verlag, Düsseldorf und Zürich, 2004, S.18. エーリッヒ・ノイマン、林道義訳『意識の起源史〈改訂新装版〉』紀伊國屋書店、2006年、34頁、参照。
- (19) Vgl. *ibid.*, S.47-49. 同上訳書、70-72頁、参照。
- (20) Vgl. F. Fröbel, *Ausgewählte Schriften. Bd.2. Die Menschenerziehung*, Hrsg. v.E. Hoffmann. (*Pädagogische Texte*, Hrsg. v.W. Flitner), Stuttgart: Klett-Cotta, 4. Aufl. 1982, S.39. フレーベル、荒井武訳『人間の教育(上)』岩波書店、1964年、79頁、参照。
- (21) *ibid.*, S.40. 同上訳書、81頁。
- (22) *ibid.*, S.42. 同上訳書、86頁。
- (23) F.Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v. W. Lange, Abt.1, Bd.2, 1863, 1966, S.387. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三巻(教育論文集) 玉川大学出版部、1977年、341頁。
- (24) F. Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v.W. Lange, Abt.2, 1862 u.1874, 1966, S.30. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第四巻(幼稚園教育学) 玉川大学出版部、1981年、67頁。
- (25) Vgl. *ibid.*, S.50. 同上訳書、105頁、参照。
- (26) F. Fröbel's *gesammelte pädagogische Schriften*, Hrsg. v.W. Lange, Abt.1, Bd.1, 1862, 1966, S.217. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻(教育の弁明) 玉川大学出版部、1977年、344頁。
- (27) *ibid.*, S.218. 同上訳書、345頁。
- (28) *ibid.*, S.218-219. 同上訳書、346頁。
- (29) *ibid.*, S.219. 同上訳書、346-347頁。
- (30) F. Fröbel, *Die Menschenerziehung*, a.a. O., S.55. 前掲訳書『人間の教育(上)』、115頁。
- (31) *ibid.*, S.85. 同上訳書、190頁。
- (32) *ibid.*, S.87. 同上訳書、195頁。
- (33) *ibid.*, S.157. フレーベル、荒井武訳『人間の教育(下)』岩波書店、1964年、32頁。
- (34) Vgl. F. Fröbel, *Grundzüge der Menschenerziehung*, in :



- F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a. O., S.428-455. 前掲訳書『フレーベル全集』第三巻、113-159 頁、参照。
- 豊泉清浩「フレーベル教育学における基本構想の展開に関する一考察——父性から母性へ」、『浦和論叢』第32号、浦和大学短期大学部、2004年、136-140 頁、参照。
- (35) Vgl. F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.2, a.a. O., S.509-512. 前掲訳書『フレーベル全集』第三巻、539-544 頁、参照。
- 前掲、豊泉清浩「フレーベルの球体法則における対立と結合——ユング心理学の観点から」、7 頁、参照。
- (36) 球体法則の輪郭は、主に次の三つの資料によって明らかになる。
- ① M.Bode, Friedrich Fröbels Erziehungsidee und ihre Grundlage, in: Zeitschrift für Geschichte der Erziehung und des Unterrichts 15 (1925), S.118-184.
- ② A.Rinke, Friedrich Fröbels philosophische Entwicklung unter dem Einfluß der Romantik, Langensalza, Hermann Beyer & Söhne (Beyer & Mann), 1935, S. 117-118.
- ③ F. Fröbel, Aphorismen, Vorbemerkung des Herausgebers, in: F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a. O., S.263-264. 前掲訳書『フレーベル全集』第一巻、409-411 頁。
- 前掲、豊泉清浩「フレーベル教育学の研究方法としてのユング心理学について」、109-111 頁、参照。
- (37) F. Fröbel, Die Menschenerziehung, a.a. O., S.7. 前掲訳書『人間の教育 (上)』、11 頁。
- (38) *ibid.*, S.7. 同上訳書、12 頁。
- (39) *ibid.*, S.8. 同上訳書、13 頁。
- (40) Vgl. E. Neumann, Ursprungsgeschichte des Bewusstseins, a.a. O., S.18-24. 前掲訳書『意識の起源史 (改訂新装版)』、34-43 頁、参照。
- (41) Vgl. C.G. Jung, Gesammelte Werke, 11. Bd., Zur Psychologie westlicher und östlicher Religion, Hrsg. v. M.N. -Jung, L.H. -Eisner, F.Riklin, L.J.-Merker, E.Rüf, L.Zander, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S.328-334. 前掲訳書『元型論 (増補改訂版)』、370-379 頁、参照。
- (42) 森崇司『ノヴァーリス——夜の想像力考察』日本文学館、2011年、51 頁、参照。
- (43) 吉山登『マリア』清水書院、1998年、85-86 頁。
- (44) スキレベークス、伊藤庄治郎訳『救いの協力者 聖母マリア』聖母の騎士社、1991年、176 頁。
- (45) 豊泉清浩「フレーベル教育学の西洋精神史における位置づけについて」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第61巻、2012年、166-169 頁、参照。
- (46) Vgl. C.G. Jung, Gesammelte Werke, 9. Bd.2, Aion. Beiträge zur Symbolik des Selbst, Hrsg. v. L.J. -Merker, E. Rüf, Walter Verlag, Düsseldorf, 1995, S.186, S.248. C. G.ユング/M-L.フォン・フランツ、野田倬訳『アイオン』人文書院、1990年、194 頁、260 頁、参照。
- (47) Vgl. *ibid.*, S.284. 同上訳書、297-298 頁、参照。
- (48) Vgl. C.G. Jung, Gesammelte Werke, 11. Bd., a.a. O., S. 466. C.G. ユング、林道義訳『ヨブへの答え』みすず書房、1988年、148-149 頁、参照。